

【随筆・立志編】

ふるさとのことば 2

別れの言葉は、明日も会える仲間との一日のメとして言う言葉と、今度いつ会えるかわからない別離のあいさつを交わすものとあるが、後者の「さようなら」を「信州・ふるさとのことば」八十二文化財団発行の書で探って口に出してみると、チンプンカンプンの外国語のように聞こえて、意味も分からないもので、言語学者でない私には歯がたたない・・・

○北部（北信）のサイナは、語尾に「ラ」を付けると関西のサイナラを連想するが、サイナだけでは分からない。北信育ちの私の少年時代からの別れのあいさつとしては、ジャア、とかマタナ、（成人になってはデワ）であるが、小学校に通うようになって、漸くサヨウナラを覚えたがこれは標準語であって、学校の帰り道で交わしたあいさつは、バイバイ、マタアシタ、ジャアの記憶でしかない。

今度いつ会えるかわからない別離のあいさつは、大人になってからの経験であって、オゲンキデ、タッシャデナ、ジャア、ヨロシクが思いつくが、アバヨは聊か心が重くなる。東京生活をして青年時代に郷里にもどってからは、何と上品にコキゲンヨウ、ゴメンナスッテ、オタッシャデと変化した但標準語は舌を噛みそうになる。

○東部（東信）のオカセギナンシ、オヤスミナンシ、オヤスミナサッテ、ゴメンナンシは、明日も屹度会える会話として分かるが、ハイサイ、アチャといわれても意味不明だ。かつて、ある人とある場所であったら、いきなり「ハイサイナラ」と言われて立腹したが、「ハイサイ」はことによると彼女の遠いご先祖様が信州であることを考えると、方言が耳の奥底にあっての発言であったかと。

○中部（中信）の、アバヨ、サイナ、サイナラは分かるが、いきなりアバ、アバコ、アバナ、アンバ、アンバヨー、ゴセッカクナシテ、オナンチョウモエと言われても、意味がさっぱり分からない。アが頭にあることが中部、南部に共通であることが興味深い。

○南部（南信）の、アバヨ、はわかるが、いきなりサイナ、アバ、アバイ、アバヤ、アバエ、アバー、アバナア、アバヨオオ、アバナと言われても、チンプンカンプンで信州に居るのだから、どこの国にいるのだから、何を言われたのか分からない。

方言は、言われた言葉を即座に解する人たちによって自治が営まれ、このことが或いは、命と引き換えになったのかもしれない。集落の維持、一族の安寧、心の結びつきが命が保障される大事なものであったと推測する。

たかが一言であるが、地方による刻み込まれた歴史とそこに住まう人々の温もりを感じとれないか。方言の価値はそこにあるのではないか・・・

平成 28 年 5 月 27 日記す